第28回 少年の主張　鏡石町大会

7月31日㈮、町健康福祉センター多目的室で第28回少年の主張鏡石町大会が開かれ、小学生8人、中学生６人が出場し、小学生の部は藤尾優結さん（鏡石一小6年）、中学生の部は町島暖奈さん（鏡石中3年）が最優秀賞を受賞しました。また、中学生の部で折笠琴音さん（鏡石中２年）、品川陽加さん（鏡石中１年）が優秀賞を受賞しました。中学校の部の３人の作品は、９月25日㈮に相馬市で開催される県大会に推薦されます。最優秀賞の２人の作品を紹介します。

「平和な世界のために」

鏡石一小6年　藤尾　優結

「どうして人類は戦争をくり返してしまうのだろう。」ふと私は思った。

そう思ったきっかけは六月二十三日のニュースで目にした、沖縄戦終結「慰霊の日」を迎えた時に、語りべとしてお話をされた方の言葉だった。

「生きたいと願った証、平和は当たり前ではない。今ある日常の大切さを感じてほしい。もう二度と沖縄の空を戦争で染めてはいけない。」

この言葉が私の心にぐさっとささった。

当時の人々は、健康で元気な人でさえ、とつぜん命を失わなくてはならない日がくるという残こくな現実があたり前になっていたのではないだろうか。そう思うと私の胸は深い悲しみにしめつけられた。

もし今急に戦争がはじまり、私の家族や友達、身近な人々が戦争に行ったり命を落としたりしたらと想像してみた。想像するだけで胸が苦しくなった。しかしテレビのニュースでは、親を亡くした子ども達、子どもを亡くして泣きくずれている親、家や住んでいる町がこうげきされ、がれきとなっている様子などが毎日のように流れている。今の生活が当たり前ではなく、どれだけ幸せなのかを思いしらされた。

そして私には一つの疑問が生じた。それは、「国民を守るべき存在の国の代表が、国民をまきこむ戦争を正しい選択として実行してしまうのはなぜなのだろうか」という疑問だ。国民はこの人なら守ってくれると信じて国の代表を選んでいると思う。なので国の代表である人々は、すぐ戦争を実行するのではなく、互いに納得するまで話し、話し合いで問題を解決するべきだと思う。私たちも何か学校で問題があれば、なぐり合いのけんかをせず、話し合って決めている。すぐ戦争を実行する選択をしないでほしい。そうすることでニュースで見たような家族を失って悲しんだり、住む家をなくして困ったりする人がいなくなると思う。日本は憲法で二度と戦争をしないと決めたと社会の授業で学んだ。日本はこの憲法を二度と変えることなく、これからも守り続けてほしい。今戦争をしている国々も、もう二度と戦争をしないと決めれば国民も安心して生活を送ることができると思う。

戦争がおきるきっかけは、きっと意見のくいちがいや自分中心に物事を考えてしまうことだと思う。私は戦争を止める力はまだ持っていないが、自分にできることもきっとあると考えた。それは相手の気持ちを考え、話し合う大切さを理解すること。一人ひとりが思いやりの心を持ち、困っている人に優しく接することだ。それが平和につながる身近な第一歩だと思う。なのでもしいじめられて悲しんでいる友達がいたら、話をたくさん聞いてなぐさめたりいじめをなくしたりしてあげたい。また、勉強のことで困っている友達がいて、もし自分が分かる内容だったら、その解き方をていねいに教えて助けてあげたい。小さな平和が大きな平和につながっていけばいいなと思う。

今回、戦争という残こくな出来事をまのあたりにして、悲しみや怒りの気持ちが深く心に刻まれた。しかし、このことで平和の大切さを改めて実感し、自分が今できることを考えることもできた。

いつか世界中の人々が安心して、笑顔で暮らせる日がやってくることを願って、私はこれからも自分ができることを続けていきたい。

「普通じゃない」

鏡石中3年　町島　暖奈

普通じゃないって、本当に悪いことなのだろうか。私はこの問いをずっと頭の中に持ち続けている。私たちは日常の中で、何気なく「普通」という言葉を使って、人や行動を判断している。「普通はこうする。」「それは普通じゃない。」その一言で安心したり、逆に誰かを遠ざけてしまったりする。しかし、その「普通」は一体誰が決めたものだろうか。

私は、バレーボール部でセッターをしていた。その中で「普通」という言葉に何度もぶつかってきた。セッターには、「基本の形」「理想のトス」というものがある。指導の中でも「まずは普通のトスを安定させろ。」と言われ続けてきた。私も最初は、それが正解だと思い込み、ひたすら教えられた通りに上げることだけを考えて練習していた。しかし、試合の中で、その「普通」が通じないことがあった。レシーブが乱れ、ボールが大きくずれた時、私はきれいな形に戻そうとした。しかし、その一瞬の迷いのせいでスパイクのタイミングが合わず、攻撃は止められた。その時初めて、「普通のトスにこだわることが、逆にチームを苦しめているのではないか」と考え始めた。次のプレーでは思い切っていつもとは違うトスを上げてみた。そのボールをスパイカーが決めた瞬間、私は初めて「正しい選択がある」ということを実感した。

セッターにとって大切なのは、普通の形を守るのではなく、その瞬間にとって最も得点につながる選択をすることだった。つまり「普通」とは絶対的な正解ではなく、ただの出発点に過ぎないのではないかと思った。

それでも私たちは「普通」という言葉に強く影響されている。授業や部活動、日常生活でも「普通こうする」という言葉は安心をくれる。その一方で「普通じゃない」この言葉を言われた瞬間に、自分の考えや行動を否定されたように感じてしまうことがある。しかし、本当に怖いのは、「普通じゃないこと」ではなく、「普通かどうか」でしか物事を見られなくなることだと思う。もしすべてを「普通じゃない」かで判断してしまえば、その中にある工夫や努力、理由などは見えなくなってしまう。

そもそも「普通」は一つではない。例えば、日本では交通ルールによって車は左側通行している。しかし、アメリカ、ドイツ、フランスなど多くの国は、右側通行が「普通」である。国や地域が違えば求められるルールは変わり、時代が変われば、当たり前も変わる。つまり「普通」とは固定された基準ではなく、その場ごとに揺れ動く曖昧な目安にすぎない。だとしたら、「普通じゃない」という言葉は、時に相手を理解することを拒否する言葉になってしまう危険もある。一方で、「普通」と違うという事実は、新しい選択や可能性が生まれる入り口でもあるはずだ。私はセッターとして学んだことがある。それは「正しい形を守ること」よりも、「今この瞬間に何が最適化を考えること」の方が難しく、そしてずっと重要だということだ。その判断は、必ずしも普通の中にはない。だからこそ私は「普通」という言葉に安心して流されるのではなく、一度立ち止まって考えられる人でありたい。本当にそれは正しいのか、それともただの思い込みなのか。誰かの「普通」に合わせるのではなく、その背景にある理由や工夫に目を向けられる人でありたいと思う。

「普通」とは正解ではない。ただの基準の一つに過ぎない。本当の価値は、その先にある選んだ理由の中にあるのだと思う。私はこれからも「普通」にしばられず、その瞬間にとって最適を選び続ける人、そして考え続けることをやめない人でありたいと思う。

第 28 回少年の主張鏡石町大会に出場した皆さん